5 心情・人物像

学習目標
- 心情を、直接・間接的に示している表現に注目しよう。
- 登場人物の心情（心情の変化）を、理由も含めて読み取ろう。
- 登場人物の特徴や考え方などをつかみ、人物像を捉えよう。

要点のまとめ

●心情

話が展開していく中で、出来事に対して登場人物がどう感じているか、どのように思いが移り変わっているかを、その理由も含めて読み取る。

心情の捉え方

❶直接心情を表す表現に注目する。
例 ユミコは心からうれしいと思った。

❷人物の行動・様子・会話などに注目する。
例 父は深いためいきをついた。（行動）→落胆
姉は、本番を前にそわそわと落ち着きがなかった。（様子）→緊張
「あなたの顔など二度と見たくない。」と強く言った。（会話）→怒り

❸情景描写に注目する。
例 地上にはあたたかな太陽の光が降り注いでいた。
→幸せ、喜びなど、明るく穏やかな気持ち

●人物像

人物像は、外見や年齢など、事実として読み取れることを押さえたうえで、性格や考え方などの目に見えないものについて読み取る。

人物像の捉え方

❶事実として読み取れること（年齢・職業・外見的な特徴・立場など）を捉える。
例 ユウトが二年一組の教室に入って席につくと、同じ野球部のヒロシが近づいてきた。→ユウト＝中学二年生・野球部に所属

❷目に見えないもの（性格・考え方・価値観など）を捉える。
▪性格や考え方を直接表す言葉など
例 花子は、昔からどちらかというと引っ込み思案なほうだった。
▪出来事に対する行動パターン、人への接し方、物事に対する感じ方など
例 友人の受けた不当な扱いに、私は心底腹を立て、猛然と抗議した。
→友達思い・正義感が強い　など

確認問題

●○● 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「①書記に塚原（つかはら）マチさんを推薦（すいせん）します」

一年五組の教室で、威勢よく手を挙げた光田（こうだ）琴穂（ことほ）の口からその声が出た瞬間、背筋に冷たいものがすべりおちた気がした。あわてて顔を見つめるが、琴穂はマチの方を見ないで、まっすぐ黒板を見つめて続ける。

「理由は、昔から字がうまいからです。小学校が一緒（いっしょ）なんだけど、その頃から何回か書記やってたもんね？」

(1) 心情理解 ——線①「書記に塚原マチさんを推薦します」とありますが、この言葉を聞いたときのマチの気持ちとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 琴穂の本心がわからず、どう対応するべきか迷っている。
イ 自分勝手な琴穂の行動が信じられず、あきれている。
ウ 思いがけない琴穂の推薦に驚き、不安になっている。
エ 一瞬びっくりしたが、琴穂から信頼されて照れている。

ポイント クラスの委員を決めている場面で、琴穂が突然、マチを書記に推薦したときの言葉であることを押さえる。すぐ後の部分から、マチの心情が読み取れる描写を探す。ここではたとえを用いて心情を表している表現に注目する。

尋ねるときだけ、マチの方を見る。マチはどう答えていいかわからず、顎だけゆっくり引いて頷いてしまった。確かにそうだった。だけど、そうやって引き受けた書記は自分から立候補したわけではなく、そのときだって誰かから推薦されたからやっただけだった。

「じゃあ、塚原さん、どうですか」

すでに委員長に決まり、みんなの前に立った守口みなみが言う。小学校の違う彼女は、まだ知り合って間もないクラスメートだったが、そのみなみから「塚原さん」と急に名前を呼ばれると、おなかの奥がきゅっと緊張したように痛くなる。

背が高く、首筋までのショートカットの髪は、いかにも昔から運動をやっていそうな雰囲気だ。そのはきはきした物言いや、何より入学して二週間足らずの新学期の教室で、堂々と手を挙げて委員長に立候補するなんて、マチには想像もできないくらいの活発さだった。

「私……」

②気後れしながらも立ち上がると、クラスの全員が自分を見るのを感じた。足がすくんだようになる。

（断らなきゃ）

小学校の頃から、いつもそうだった。自分の意見がはっきり主張できないことを、両親や先生から注意されていたし、誰かから頼まれごとをすると、マチはそれをなかなか断ることができない。中学に入ったら、そんな自分の性格を直したいと思っていた。

「どう？　塚原さん。書記の仕事、嫌？」

担任の先生までが言う。

仕事が嫌なのではなくて、こうやって流されてしまうのが嫌なのだと告げようとするが、大勢の人を前にしたら、どう言えばいいのかわからなくなった。かわりに口から「やります」というか細い声が出た。

〈辻村深月「サクラ咲く」より〉

(2)　心情理解　――線②「気後れしながらも立ち上がる」とありますが、このときマチは、書記に推薦されたことに対して、どう対応しようと考えていましたか。次の文の□に当てはまる言葉を、考えて書きなさい。

▪書記の仕事を□と考えていた。

ポイント　委員長のみなみから「塚原さん、どうですか」と意見を求められて、立ち上がったときである。「私……」と言いかけた後、何と言おうとしていたのかを読み取る。これより後で、マチが心の中で思っている言葉などに注目する。

(3)　人物像　この文章から読み取れるマチの人物像として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　優しすぎるために、頼まれると断れない一面もあるが、いったん決めたことについては自分の考えを貫くことができる人物。

イ　人前で自分の考えを示すことは苦手だが、字を書くなど、自分の得意なことを生かして人の役に立ちたいと思っている人物。

ウ　引っ込み思案で、自分から積極的に活動することはめったにないが、引き受けたことは根気よく最後までやり通す人物。

エ　気が弱い自分を変えたいと思いながら、勇気がもてず、人前に立っても自分の思いをきちんと伝えられずにいる人物。

□

ポイント　この場面で、マチは、琴穂に書記に推薦され、それについてみなみから意見を求められたり、先生から話しかけられたりしている。それに対して、マチがどのように対応しているのかを、発言や心の中の言葉、行動などに注目して押さえることで、人物像が捉えられる。

演習問題

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

明治生まれの写真師である祖父とその弟子である父が、特別に走る都電の花電車を撮影することになった。老いて腕が衰えてきている祖父は写真を撮るのが難しい場所に陣取り、霧と雪の中、古いライカのカメラで撮影しようとしている。

①「やっぱ、むりですよおやじさん――」

「けっこうじゃあねえかい。ほれ、おめえの尊敬する何とかいうベトナムのカメラマンは、鉄砲の弾ん中でシャッターを切ったんだろう。あれァいい写真だ。おそらく奴ァ、弾が飛んでくるたんびに、しめたと思ったにちげえねえ。プロってえのァ、そうじゃなきゃならねえ」

「そりゃま、そうですけど……」

心のやさしい父は、ここまで準備を整えた祖父の一世一代とも言える写真が、無残な結果に終わることを惧れたにちがいなかった。

それからしばらくの間、②父は心の底から祖父を諫め続けた。祖父は頑として譲らなかった。真摯な師弟のやりとりに、僕や母の口を挟む余地はなかった。

結局、父は強情な師匠に屈した。

「せめて、こっちを使っちゃくれませんか」

父はフラッシュをセットした*ペンタックスをさし出した。

「いや、俺のを使う。ただし、おめえもそっちで、同時にストロボを焚け。合図は昔と同じだ」

わずかの間に、雪はほぐれ落ちる真綿ほどの大粒になっていた。祖父は掌でライカのレンズをかばいながら、父の立つべき位置を指図した。

深いしじまの中で、都電の警笛が鳴った。隣りの新龍土町の停留場を発車したにちがいない。道路の向こう岸には、いつの間にか大勢の*GIが見物にやってきていた。

「おじいちゃん、写せるかなあ。ストロボ替えてる暇なんかないよ。ここ、すごいスピードで来るんだ」

母は答えずに、じっと夫と父の仕事を見つめていた。

(1) 心情理解 ――線①「やっぱ、むりですよ」とありますが、父がこう考える状況を、祖父はどのように捉えていますか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 命の危険のない安全な環境。
イ いい仕事ができる絶好の機会。
ウ 誰もが経験するべき試練。
エ 今までにない危機的な状況。

ポイント 祖父は、ベトナムのカメラマンを例に出して、プロとしてあるべき心構えを、父に語っている。そこから、祖父が、この状況をどう捉えているかが読み取れる。

(2) 心情理解 ――線②「父は心の底から祖父を諫め続けた」とありますが、このとき、父はどのような気持ちだったと考えられますか。次の文の□に当てはまる言葉を、文章中の言葉を使って書きなさい。

■念入りに準備をして撮った祖父の写真が、□。

ポイント「諫める」は、目上の人に正しい道を示して、行動を改めるように忠告することをいう。ここでは、父が祖父にどのような忠告をしたのかを、前後の内容から捉えて、父の気持ちを読み取る。

(3) 行動・様子 ――線③「写真は一発勝負だった」とありますが、一瞬の機会を逃さないように準備をする祖父の、いつもと違う様子を文章中から十三字で抜き出しなさい。

ポイント 祖父と父が、一度きりの真剣勝負に挑むために、準備をしている場面であることを押さえる。シャッターチャンスを逃すまいとする祖父の、写真師らしい様子を読み取る。

ストロボは一回で焼き切れてしまう。玉を替える間などあるわけはないから、③写真は一発勝負だった。

祖父は*ハンチングの庇を後ろに回し、街路樹の幹に肩を預けた。両肘をぐいと締め、何度もファインダーを覗きながら足場を定める。ふだんの老耄した姿など嘘のように、腰も背もしゃんと伸びていた。

一方の父も真剣だった。指示通りに少し離れた場所で三脚を開き、毛糸の帽子を脱いでカメラをかばっている。

緊密な時間が刻まれた。雪を吸って真黒に濡れた道路に、水銀を流したような二本の線路がはるかな弧を描いていた。

④母が背中から僕を抱きすくめた。僕の鼓動と同じくらい、母の*紬の胸は高鳴っていた。

花電車が来た。

向こう岸のGIたちから、いっせいに喝采と指笛が起こった。

全速力でカーブに現われた花電車は、クリーム色のボディが見えないほどの造花で飾られ、フレームには目もくらむほどの豆電球を明滅させていた。ヘッドライトの帯の中に霧が渦を巻き、轍からは雪が吹き上がった。

「まだっ！　まだまだっ！」

祖父が怒鳴った。

「いいかっ！」

「はいいっ！」

ひと呼吸おいて、祖父は*木遣りでも唄うような甲高い合図の声を張り上げた。

「ああっち！　ねええっ！　さん！」

一瞬、夜の底に焼きつけられた都電の姿を、僕は一生忘れない。

二台のストロボと同時に、都電のパンタグラフから稲妻のような青い火花が爆ぜた。真昼のような一瞬の閃光の中で、電車はそのまま止まってしまったように見えた。

〈浅田次郎「青い火花」より〉

（注）ペンタックス＝カメラのメーカー。ここでは、父の新機能カメラを指す。
GI＝当時日本に在駐していたアメリカ兵。　ハンチング＝帽子の一種。
紬＝着物の一種。　木遣り＝民謡の一種。

(4) 心情理解 ——線④「母が背中から僕を抱きすくめた。」とありますが、このときの母の気持ちとして適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　期待　　イ　緊張
ウ　羨望　　エ　不安

ポイント　母は、「僕」が話しかけても返事をせず、自分の夫と父の真剣勝負を見守っている。このような様子を捉えて、母の気持ちを読み取る。

(5) 人物像 祖父と父はそれぞれどのような人物ですか。適切なものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア　やさしい心を持ち、師に真剣に向き合おうとする誠実な人物。
イ　師への尊敬と、師を追い越したいという野心をあわせ持つ人物。
ウ　自分勝手で人の言うことをきかず、いい加減で成り行き任せの人物。
エ　常に冷静で、危機的状況でも最善の策を思いついて実行する人物。
オ　自分の腕を信じて真剣に仕事に取り組む、頑固な職人気質の人物。

祖父［　　］　父［　　］

ポイント　祖父と父が、自分のおかれた状況でどのように振る舞っているかを整理し、人物像を読み取る。

(6) 文章の把握 この文章で描かれている内容として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　仕事への厳しい姿勢。　　イ　家族への思いやり。
ウ　古きよき時代への愛着。　　エ　困難に挑戦する心。

［　　］

ポイント　父の祖父への対応、祖父と父の仕事ぶりと、それを見守る家族の様子などに着目して、文章中に描かれているものを捉える。

実戦問題

◆◇◆ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈千葉〉

江戸時代前期、大聖寺藩（現在の石川県南西部）の藩主前田利治は、苦しい財政を立て直すために、新たにやきもので産業をおこそうと考え、その参考にと明（現在の中国）から赤絵南京皿を、肥前（現在の佐賀県・長崎県）から柿右衛門赤絵皿を買った。

「定次、権左衛門、先日そちたちが持ち帰った陶石*は見たぞ。ともかく焼いてみてはどうだ。」

「はっ、しかし殿、あれで焼いても、せいぜい素焼*で、このようにつやのある色絵やきものなど、まったくどうしてよいか、めども立ちませぬ。」

定次は、不安をすなおにいった。

「ふむ、なるほどこれは、今までのやきものにはないかたやき——。田村権左衛門、そちは見たことがないか。」

「はっ、ございません。ただ、こういうかた焼のやきものを磁器と申しているということはかねがね聞いております。」

「ふうむ、磁器のう——。」

利治が、いまさらのように、色絵皿を手にとってみた。磁器ということばを、定次も聞いてはいたが、目の前に見るのは初めてであった。定次は、あの陶石で、このような色絵磁器が焼けるかどうか、まったく見当がつかなかった。

「九谷の石で、色絵の磁器が焼けましょうか。」

「ばかを申せ。このようにして、おまえたちは、陶石を見つけたではないか。えのぐの原料もいつかかならず見つかる。わしはそう信じておる。」

利治がきっぱりといった。

①しばらくあたりに沈黙が続いた。

やがて、定次が、かみしめるようにいった。

「信じているだけでは、やきものは焼けませぬ。」

それを聞くやいなや、利治が叫んだ。

「ばか者っ。」

「——。」

「焼けると信じるから、できるのだ。えのぐの原料の石が出ることを信じてさがし続けるのだ。さがしもしないで、石が出ぬといえるか、焼きもしないで、焼けぬといえるか。」

利治は片ひざを立てた。

「見ておれっ、定次。」

利治はそういうと、いきなり刀をひきよせた。神谷治部がはっとして、前へにじりよった。

利治は、刀のつばのところをしっかりにぎると、いきなりそのつかで、明の赤絵南京皿を、したたか打った。

〝カチッ〟

かたい音がして、皿は三つに割れた。

「あっ。」

座の一同が驚くまもなく、利治は、もう一枚の柿右衛門赤絵皿をも割った。

〝チャリーン〟

かたい音が、冷たい空気の中に鋭くひびいた。その鋭さは、そのまま、利治の決意のようにも思えた。

②「この皿が、どのような石でできているかよく見よ。」

利治は静かにすわった。

「——。」

「——。」

定次も、権左衛門も無言であった。

だまって頭を下げながら、

定次は、

（殿に負けた。）

と思った。九谷の山で、治助や右門と対決*したときには、権左衛門の思慮と落ち着きに負けたと思った。今は、利治の鋭い気迫に負けたと思った。

「定次、その皿のかけらは、すべてそちに与える。よく研究してみよ。同じものを焼けというのではない。めざすのは、九谷の色絵磁器だ。」

「はっ。」

利治の声はきびしかった。

「定次、権左衛門、やきものの美しさを、おまえたちの手で見つけるのだ。明や肥前のまねではない、それをのり越えて、おまえたちの手で見つけた美しさを、この

大聖寺の地に見せてほしい。」

利治は立ち上がった。去ろうとして、ふりかえった。

「わしは、色絵やきものの夢を死ぬまで捨てぬ……、が、③あわてぬぞ、よいか。」

ことばの終(おわ)りに、いたわりのひびきがあった。

定次は、利治の、やきものにあこがれる心を、しっかりと感じて聞いていた。

「はは っ、かならず焼き上げますまでは……。」

④定次も心が決まった。

神谷治部が、ほっとため息をついた。

（注）陶石＝焼き物（陶器や磁器）の原料となる石。

素焼＝つやを出すためのうわ薬を使わずに低温で焼いた質素な焼き物。

対決＝定次が陶石のことで治助や右門ともめたこと。

〈小納弘(おのうひろし)「五色の九谷」より〉

(1) ✪心情理解 ——線①「しばらくあたりに沈黙が続いた。」とありますが、その理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　利治の要望どおりに成し遂げるためには、面倒なことが多すぎてためらっていたから。

イ　利治のあまりの勝手さに怒りを感じ、これ以上の無理は聞けないと思っていたから。

ウ　利治の意向に背くわけにはいかないが、その通りにするのは不可能だと思ったから。

エ　利治の話があまりにも壮大(そうだい)なので、答えようにも答え方がわからず困っていたから。

(2) ✪心情理解 ——線②「この皿が、どのような石でできているかよく見よ。」とありますが、二枚の皿を割った利治は、定次たちにどのようなやきものを作らせたいのですか。文章中の言葉を使って、十五字以上二十字以内で書きなさい。

(3) ✪心情理解 ——線③「あわてぬぞ、よいか」とありますが、これについてまとめた次の文の［　　］A・Bに当てはまる言葉を、Aは文章中から八字で抜き出し、Bは後から適切なものを一つ選び、記号で答えなさい。

▪「あわてぬぞ、よいか」という言葉が［　A　］という言葉に重なり、定次は、利治の自分へのいたわりとともに［　B　］を感じ取ったと考えられる。

ア　期待と信頼　　イ　心配と不安

ウ　感謝と満足　　エ　依存と執着

A［　　］

B［　　］

(4) ✪心情理解 ——線④「定次も心が決まった。」とありますが、このときの定次の心の内を、「夢」「覚悟」という二つの言葉を使って、「やきものを焼き上げるまで、……」に続くように二十字以内で書きなさい。

やきものを焼き上げるまで、

(5) ✪人物像 この文章に描かれている利治の人柄の説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　藩主としての責任感が大変強く、藩民一人ひとりの希望を実現するよう家臣にきつく要求するので、家臣が襟を正して接する人物。

イ　藩主としての立場上、家臣に厳しく接しつつも目的の遂行のためには必要な助力を惜しまないので、家臣から大変尊敬される人物。

ウ　藩主としては短気で怒りっぽく、力ずくでことを進めようと無理ばかりを押しつけるので、家臣からあきれられて信用されない人物。

エ　藩主としての志が高く理想ばかりを追い求めて、目的実現のためなら人の意見を聞かないので、家臣から距離を置かれている人物。

［　　］

ポイント

(2) これより後の、定次たちに対する利治の言葉に注目し、利治がどのようなやきものを作るように命じているのかを読み取る。

(3) Aには利治が定次たちに言った言葉、Bにはその言葉に込められた心情が入る。